

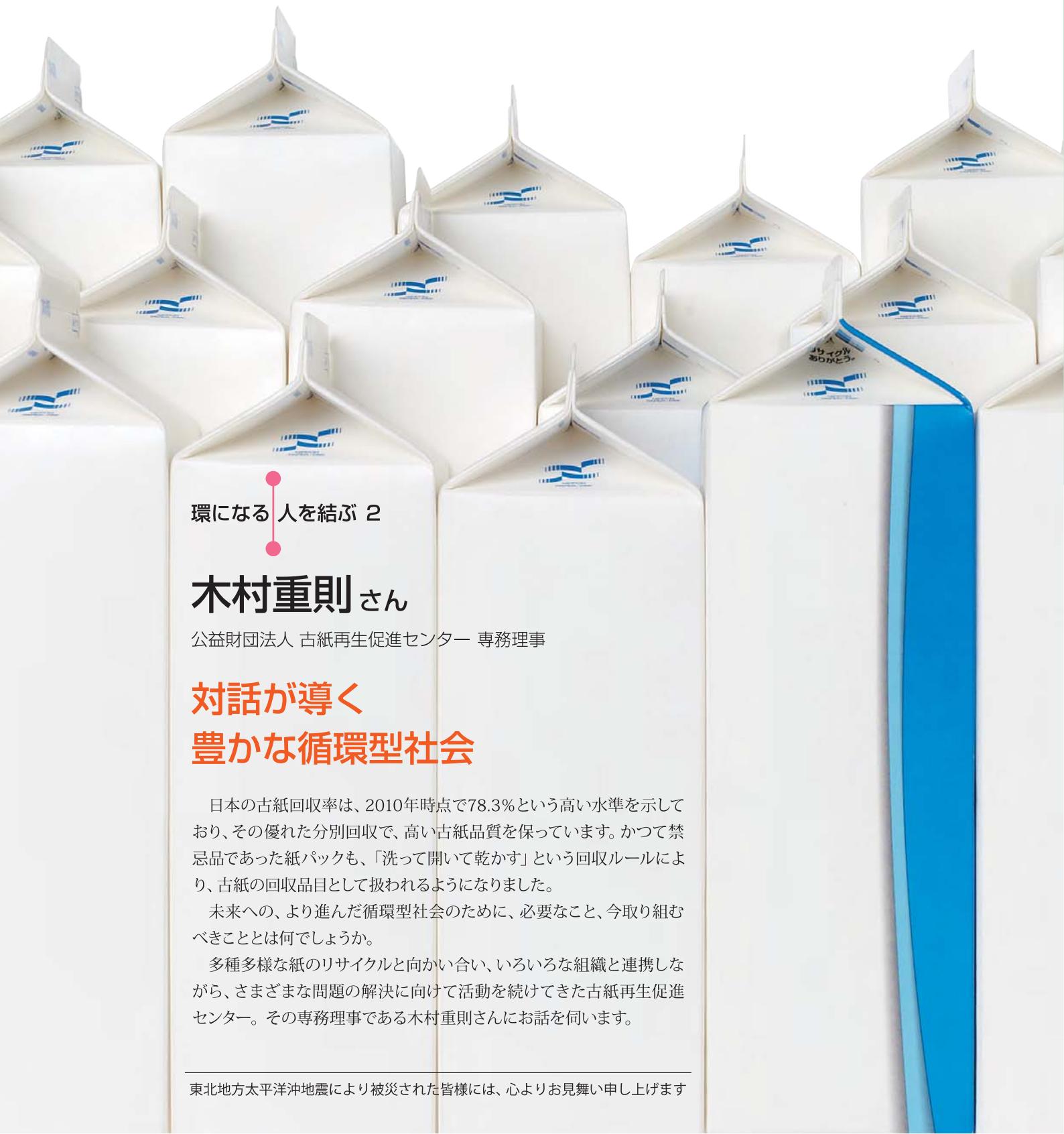
NP-PAKism

エヌピーパックイズム

2011 / 4月号

vol.14

環境や資源の保護に優れた容器「紙パック」を提供する「日本紙パック株式会社」が、リサイクルのさらなる推進を願って発行する環境情報誌です。



木村重則さん



プロフィール

木村重則（きむらしげのり）

1949年、北海道生まれ
北海道大学経済学部を卒業し、昭和48年十條製紙（現・日本製紙）株式会社入社。翌年資材部に配属となり、以来長きにわたり古紙と関わる。

平成16年、日本製紙株式会社参与、平成18年、同社岩国工場長代理を経て、平成21年、公益財団法人古紙再生促進センターの専務理事に就任。

豊かな循環型社会

古紙再生促進センター（以下、センター）は、古紙の回収と利用の促進を目的として、1974（昭和49）年に発足しました。その事業内容は、さまざまな調査・研究と情報ネットワークの運用による古紙品質の安定対策や、啓発冊子の発行などによる広報宣伝活動・古紙供給業界の資金調達に対する債務保証など多岐にわたっています。

現場に生きる

センターの活動は、紙のリサイクルの管轄塔のような存在ですか？ と伺うと、すかさず「いや、現場そのものですよ」と木村さん。木村さんは昭和48年、十條製紙（現・日本製紙）株式会社に入社し、以来40年近くにわたり、古紙と向き合ってきました。

木村さんが資材部に所属していた昭和50年代の半ば、オイルショックの影響による石油・木材の高騰により、新聞用紙産業は新聞古紙で新聞紙をつくるという大きな転換期に立たされました。古紙から新聞紙をつくるということに確固たる確信がなかつた時代あるがままではなく、ビジョンをもつて仕事をするのだ、という上司の姿勢に強く影響を受けたと言います。

「一時は限界だと言われていた古紙の回収も、自治体を歩いて回るとまだ可能性があると感じられました。過去のデータにとらわれることなく現場を歩いて知ることの大切さを実感しましたね」

現状を知り、それに即した企画提案をする、それは現在のセンターのすべての活動と共に通しているものもあります。

さまざまな視点に立ち、環をつけないでいく

学乳パックをリサイクルすることで、小さい子どもたちにも環境への意識が高まっています。日本の古紙品質の高さは、非常に優れている分別回収によってもたらされてきました。そこにある日本人としての美德や誇りを、環境教育を通して伝えていき

ます。更に進んだ分別回収と有効利用のために今必要なことは、リサイクル対応型の製品開発と、すべての紙・紙加工製品に共通した、リサイクル適性の識別マークの普及だと思います。リサイクル適性とは、古紙を段階別に有効利用していくために、印刷物を、A＝紙・板紙への利用、B＝板紙のみの利用、C＝どちらへも利用阻害になるもの、D＝不可能なもの、と4つにランク付けするというものです。センターが、日本印刷産業連合会と進めている事業ですが、すでに一部では使用されています

このランク付けにより、印刷・加工業者であれば、どの資材を使って製作すれば、どのランクの紙になるのかを明確にることができます。排出者である一般市民には、この識別マークが、より進んだ分別回収を可能にさせます。



リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

刊行物に使用されている
リサイクル適性マーク。



古紙再生促進センターによる刊行物。
オフィス向け・小中学生向けなど
さまざまなものが発行されている。

木村さんは、社会には、生活や文化をささえれる産業と労働があり、リサイクルはそれを資源ベースで支えている、また、資源化への過程で新たな産業と雇用を生み出す、その理解が少ないのです。むだなく使った上で、分別の重要性を理解してもらえるよう、おもしろい教材を、先生方と一緒に制作してみたいと考えています

紙パックのリサイクルが、市民レベルから自治体

を動かすに至ったことは、現在古紙回収で再生不可能となっている禁品の、新たなリサイクルへのひとつの中核となるであろうと木村さんは言います。しかし残念なことに、相当数の使用済み紙パックが、家庭からなる「雑がみ」古紙に混入していることが報告されています。センターでは、この調査データを自治体に広報として利用してもらい、紙パックの分別促進につなげてもらえばと考えています。また今後、ゴミ化している紙ごみの組成分析も実施することで、その全体像を明らかにし、紙パックのリサイクル業界とも連携しながら、回収率・利用率の向上へ取り組みたいと考えています。

「大切なことは、さまざまな立場の人間が積極的に交流をし、批判ではなく互いの理解を深めていく対話の場をもつことだと思います」

公益のため、国内古紙のコンセンサスを形成する

Report

エコプロダクト2010出展

日本最大級の環境展示会『エコプロダクト2010』は、昨年も12月9日から3日間、東京ビックサイトで開催されました。

12回目となった今回のテーマは「グリーン×クリーン革命！いのちをつなぐ力を世界へ」。「2020年までに温暖化効果ガスの25%削減」を前提とし、今何ができるのか、これから10年で何をしなければならないのかを考え、実践する場として構成され、さまざまな展示の他にシンポジウムやセミナーなどが行われました。入場者数は183,140人と過去最高で、学校や幼稚園からの子どもたちも数多く訪れていました。

当社は、日本製紙グループと全国牛乳容器環境協議会（容環協）、印刷工業会の出展に参加しました。

日本製紙グループでは、今回のテーマを『木の可能性—Made in 日本製紙—』としてグループ会社各社から出展があり、当社もエヌピーパック・フジパック・紙カップなどを展示し、当社製品の良さを広くアピールしました。

容環協では、紙パックのリサイクルに関するパネルや再生品の展示、紙パックを使った手書きハガキ作りの体験などのイベントを通じ、紙パックリサイクルへの理解を図りました。

どちらのブース多くの来場者が興味深く見学され、大盛況でした。

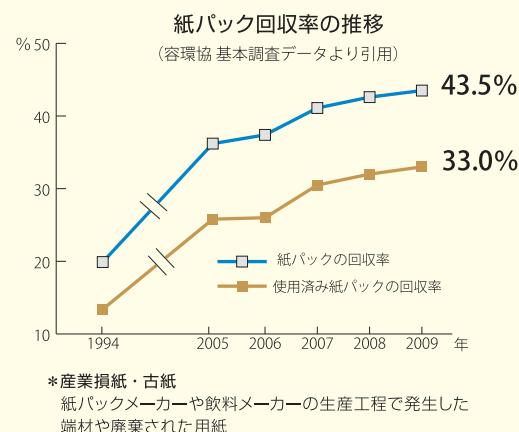


2009年度の紙パックリサイクルの実態

2015年回収率50%以上の達成に向けて、全国牛乳容器環境協議会は行動計画を立て取り組んでおります。

2009年度の紙パックの回収量（産業廃棄物・古紙*を含む）は、106.2万トン、回収率は43.5%（対前年0.9ポイント増）、家庭や学校などから出される使用済み紙パックの回収率は、33%（対前年1.0ポイント増）と前年度に引き続き上昇しました。

また、今回の古紙再生促進センターの取材でも報告されていました使用済み紙パックの「雑がみ」古紙への混入は、容環協の調査でも明らかになっています。家庭紙に再生できる、付加価値の高い紙パックの分別の促進を、容環協、古紙再生促進センターと共に取り組んでいきたいと思います。



赤星たみこの Milk Break

東日本大震災に被災された方々へ、心よりお見舞い申し上げます。

こんな時期だからこそ、紙の大切さが身にしみてわかります。避難所で風邪やインフルエンザが蔓延しないよう、咳をするときは必ずティッシュペーパーなどで口を覆うようにと、医療の専門家がアドバイスしていました。手に直接ウイルスがつかないようにですが、避難所ではそれもなかなか手に入らない場合も多いとか…。

紙は何かを記録したり、物を包んだり、汚れを拭きとるのにも使われます。生活に無くてはならないものです。あらゆる紙が被災地に早く届くよう、買占めなどせず、また、紙パックのリサイクルにも真剣に取り組まねば！と思いました。

紙パックはバージンパルプで作られていますから、それが再生紙になると、丈夫できれいな紙になります。作る時に使う漂白剤も少なくてすみます。生活の中から資源の大切さをしっかり意識して、紙パックのリサイクルに励もうと思います。



■赤星たみこ
漫画家・エッセイスト。
エコや家事に関する連載や著作多数。
環境問題の講演会でも活躍中。



日本紙パック環境情報誌 NP-PAK ism Vol.14 2011年4月発行
編集：日本紙パック株式会社 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-2-2
TEL (03) 6665-5555 (代表) FAX (03) 3212-0605
e-mail npp-qa@nipponpaper-pak.co.jp URL http://www.nipponpaper-pak.com

当社のウェブサイトから環境情報誌「NP-PAKism」の
バックナンバーがダウンロードできます。